

論文

横山古墳群の再検討

——越前三尾氏・三国氏研究の一齣として——

堀 大 介

[抄 録]

福井県あわら市・坂井市所在の横山古墳群は、越前を母体とした継体大王の関連氏族である三尾氏・三国氏の奥津城として知られる。継体を考えるうえでの重要古墳群であるが、調査・研究に関しては2001年発表の中司照世論文の以来、20年以上も停滞している。そこで、研究史の整理と問題点を提示し現地踏査を実施したうえで、新出資料も加え従来の見解や資料解釈の見直し、本古墳群内における有力墓および越前全体の最有力墓系列を再検討した。結果、主に最有力墓に採用される主墳と陪塚という関係が5世紀後葉から認められ、系列上の画期ととらえ直した。6世紀以降になると、大小の前方後円墳の併存および主墳と陪塚というセット関係の継続的なあり方は、他の越前の有力墓系列には認められない状況から重層的な政治体制を構築していた可能性について指摘した。本古墳群内の有力墓の被葬者は5世紀末まで松岡古墳群を中心とする越前の最有力墓の被葬者との関係性が強かったが、6世紀になると一時的ではあるが、従来の在地勢力を中心としながら東海との政治的な関係性を有した勢力も併存していたことを明らかにした。

キーワード 有力墓系列、前方後円墳、陪塚、埴輪、重層的な政治体制

はじめに

横山古墳群は福井県あわら市、坂井市に所在する北陸最大規模の古墳群で、南北約3km、東西約2.1kmの独立丘陵上に位置する。北は、あわら市中川区・瓜生区を経て坂井市丸岡町坪江区に至り、丘陵は南北に長く南東にかけてL字状に展開する。大部分の古墳は丘陵上にあり、南東部および南西部の低地にも一部存在している。現在の総数は301基であるが、消滅古墳を含めると約310基を数える。なかでも前方後円墳の数が15基と多く、福井県内の約3分の1を占める。単に県内の重要古墳群というだけではなく、本古墳群のある坂井市、あわら市の東部

付近は、『日本書紀』によると継体天皇即位前の政治拠点であり、継体勢力を支えた三尾氏および三国氏の奥津城とも考えられている。これまで分布調査をはじめ発掘調査の成果をもとにした多くの研究が知られるが、なかでも中司照世による「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」の論文は分布調査を含めた到達点ともいえる内容である⁽¹⁾。しかし研究史を整理すると、細部では個別古墳の築造時期に相違があり、大規模古墳に隣接する小規模古墳についても陪塚と考える向きはない。また中司論文以後の新資料もあるため、これらを含めた古墳群全体としての再検討が必要である。そこで、まずは横山古墳群に関する研究史を整理して問題点を抽出し、従来の研究成果を踏まえたうえで改めて分布調査を実施する⁽²⁾。そして横山古墳群内における主要古墳の墳形・築造時期などを再検討し、従来の見解との違いを指摘するとともに有力墓および最有力墓系列を提示する⁽³⁾。群内の様相を把握することで、継体が母体とした越前の政治的動向とその登場に至る歴史的背景を考えるうえの基礎資料を提示したい。発掘調査数が少ない現状で有力墓系列論を展開するのは難しいが、本稿は現状ある資料をもとに構築した仮説と理解されたい。

1. 研究史

(1) 1910～70年代

横山古墳群内で最初に発見された古墳は椀貸山古墳であり、『福井県坂井郡誌』（1912年発行）には「わんかし山 坪江村瓜生地籍にあり誰の古墳なるを知らざれども玉環土器等を発見せり」とある⁽⁴⁾。『福井県誌』（1920年発行）には「北部坪江村に椀貸山あり、その形式前方後円墳にして埴輪を有し濠を廻し、主軸の直径通じて四十一間前方部の幅十三間半高さ十九尺乃至二十二尺余、所在の地高向の郷に当るを以て、古来男太迹皇子に関係ある遺蹟地と称せらる。その付近北部一帯に古墳の分布猶多し。転じて金津三国の付近相連接せる丘陵地の縁辺に、塚形及び横穴の古墳多く、遺物出土の地少からず。」とあり⁽⁵⁾、同年発行の『若狭及び越前に於ける古代遺跡』にも上田三平の報文があるので⁽⁶⁾、椀貸山以外に横山の丘陵地に多数の古墳が存在することは知られていた。

分布調査による具体的な基数の提示は1950年代である。波佐谷順成は前方後円墳13基をはじめとする約70基からなる古墳群として詳細な分布図を公表し⁽⁷⁾、高堀勝喜・吉岡康暢はその成果をもとに継体後裔氏族である三国公一族の奥津城と指摘した⁽⁸⁾。斎藤優は昭和27年（1952）に横山丘陵の全域を踏査して前方後円墳14基と円墳など100基余の数を示し、前方後円墳を横山1～14号墳と呼称し所在場所を明示したうえで個別の概要、昭和30年（1955）発掘の神奈備山古墳、昭和31・32年（1956・57）発掘の2、3基の円墳（中川18・20・21号墳か）を報告し、古墳の編年や群形成にかかわる氏族の特定まで論究した⁽⁹⁾。具体的には瓜生支群の前方後円墳4基を最古式、特に5・6号墳（瓜生4号墳・瓜生山城古墳）を前期形式として4世紀末にく

ならず、1・12・14号墳（椀貸山古墳・中川12・70号墳）を中期の5世紀代、3・8・11号墳（坪江4号墳、中川61・10号墳）を後期の6世紀中頃～後半頃に比定し、瓜生支群から始まり中川支群を経たあと中川・坪江の両支群への展開を考えた。

本格的な分布調査は1970年代後半に実施される。福井県教育委員会は昭和52年（1977）に神奈備山古墳の確認調査を実施し、その概要とともに昭和49・50年（1974・75）における全域の分布調査の成果も提示して233基の総数を示した⁽¹⁰⁾。しかし、総数については丘陵東端の一部に未踏査地区があるため暫定的なものに過ぎず、従来の分布図に対しても「古墳の所在地点が著るしくずれ、また、城砦跡を古墳と誤認し、さらに総基数についても問題を残すなど、修正すべき点が多い」、「各古墳の呼称については、従来の名称を使用せず、個有の俗称あるいは支群番号をもってこれにあてたい」としている。南西端の坪江支群は42基を数え、支群中央部の丘陵上にある多数の方形台状墓については「原目山古墳群（支群）を抱える松岡古墳群など、当地方の大多数の古墳群と同様な群形成の端緒」と述べる。

また坪江1～8号墳の位置図を示し、椀貸山古墳（坪江1号墳、前方後円墳、詳細は割愛）、坪江2号墳（前方後円墳、6世紀前葉）、坪江3号墳（直径20m前後の円墳、小型勾玉1・鉄剣1・須恵器片、造営時期は1・2号墳に近接）、神奈備山古墳（坪江4号墳）、坪江5号墳（4号墳の東側）、坪江6号墳（4号墳の北側）、坪江7号墳（直径22.5mの円墳、高さ5.2m、横穴式石室天井石の露出）、坪江8号墳（21m×18mの方墳、高さ3m、7号墳に隣接）の概要を述べた。

神奈備山古墳の被葬者については「初代の手繰ケ城山古墳の被葬者や次代の六呂瀬山古墳の被葬者などから地方首長権を継承した後代の地方首長であり、また同時に最後の大首長でもある」とし、「神奈備山古墳以後の地方首長墓と考えられるものは存在せず、このことは大和政権による地方首長制の解体という、政治体制の一大変革期が将来したことを示し」、「やがて来るべき激動の波に対処せねばならぬところの、地方大豪族の在地的動向を如実に物語る」とし、神奈備山古墳のもつ意義はきわめて大きいとしている。

(2) 1980～90年代

1980年代前半には個別古墳の具体的な検討が始まる。古川登は昭和56年（1981）9月に波佐谷順成らと中川64号墳の測量調査を実施し、その成果とこれまで採集された埴輪について報告した⁽¹¹⁾。中川64号墳については外部施設に埴輪を使用した長辺約12.5mの小規模方墳で、築造時期を6世紀前半に比定した。群内における6世紀前半の埴輪を使用した古墳の特徴をまとめ、墳形・規模・外部施設に差のあるのは階層的な差位を反映し、4つのグループから4つの階層性の可能性について指摘した。中川64号墳と坪江6号墳をともに最下層に位置づけるが、中川64号墳が65号墳に近接して従属する形で位置するのに対し、坪江6号墳の方は周囲に埴輪を使用する大規模古墳がない点で異なるとし、「主軸の長さ約38.0mを測る前方後円墳の65号墳に

従属する形で位置し」、「近接して造営する必要性があった事によるものと考えられるから、64号墳は65号墳の陪塚である事がうかがえ」、「その被葬者は65号墳の被葬者と近い関係にあった人物」と述べる。小規模方墳を陪塚と考えた点は重要といえる。また古川は6世紀における越前・加賀の埴輪を資料紹介し、尾張形埴輪などにもとに東海との政治的関係性について言及した⁽¹²⁾。横山古墳群については椀貸山古墳・坪江2号墳・坪江6号墳・中川51号墳・中川61号墳・中川65号墳の6基で採集された埴輪を集成し、築造時期を比定するうえでの有用な資料となっている。

1980年代後半になると、詳細な測量図による議論が始まる。青木豊昭は越前における規模・墳形などから検討し、越前の大首長墓について4～5世紀代は松岡と丸岡の両古墳群で2期における越前のほとんどの地域首長墓は円墳とし、前方後円（方）墳で埴輪をもつのは「大首長墓以外では中川中古墳のみであって、中川中古墳の被葬者は大首長と姻戚関係をもった」とみている⁽¹³⁾。また、6世紀には金津古墳群と松岡古墳群で3期の鳥越山古墳、三峰山古墳、椀貸山古墳、中川奥1号墳、神奈備山古墳は6世紀初～6世紀半で、大首長墓が松岡地域と金津地域の両方に築かれるという。規模の大きさと葺石・葺石・段築などの外部施設と内部主体に石棺や石屋形を採用する点は中小首長墓に比べると著しく格式が高く、その被葬者は「中小首長墓の被葬者である地域首長の上に立つ地方首長」と考えている。松岡地域の鳥越山古墳や三峰山古墳は高所に立地し、外部施設の埴輪・葺石・段築を施さず、規模も小規模なことから大首長の勢威は再び低下し、しかも内部主体は舟形石棺を想定できる点はヤマト王権の盟主墓と比べ地方的特徴が顕著であるという。

これに対して金津地域の椀貸山古墳は小規模にもかかわらず墳形は整い、埴輪・葺石・段築・周溝などの外部施設をもち、平地に立地する点で松岡地域の大首長墓に比べて畿内的なあり方であり、後続する中川奥1号墳、神奈備山古墳も低丘陵頂に立地し、外部施設や墳形を整え、横穴式石室内に石屋形を採用するものもあるので総合的に金津地域の首長墓が勝っているとし、金津地域には大首長墓以外に5基の前方後円墳が集中するのは「6世紀前半といえば、継体が皇位につく時期であり、それと金津地域への大首長墓の出現や異常とも思われる前方後円墳の集中状態を示す事実とは密接な関係がある」と述べる。

次に青木は群内の前方後円墳の墳丘測量図と出土遺物を紹介し、坪江支群をA群、瓜生支群南部をB群、瓜生支群北部をC群、中川支群をD群の4つに分けて各支群の系列や変遷について考察した⁽¹⁴⁾。A群では5世紀前半以前に瓜生南1号墳→瓜生南2号墳→瓜生南3号墳、5世紀後半に瓜生南4号墳→瓜生南5号墳、6世紀前半に椀貸山古墳→神奈備山古墳、そして椀貸山とは別に椀貸山2号墳の系列が並存する形を推測している。B群では5世紀前半以前から中葉にかけて瓜生北1号墳→瓜生北2号墳→瓜生北3号墳→瓜生北4号墳、C群では5世紀前半以前に城ヶ岳南古墳のみの築造を推測した。D群では5世紀後半に築造が始まり城ヶ岳古墳→中川中古墳、6世紀前半に中川奥2号墳→中川奥1号墳ならびに中川奥4号墳→中川奥4号

墳と2つに分かれ、6世紀後半には再び1系統に統合され中川南古墳→中川北古墳の変遷を推測した。なお系列としては5世紀中頃にB群→D群へと移動し、1985年論文を継承し椀貸山古墳・中川65号墳・神奈備山古墳の3基を6世紀前～中葉にかけて継起して造営された3代にわたる大首長墳と推定した。

(3) 2000年代

2000年代には青木説に対する批判と、群内および越前全域における新たな最有力墓系列が提示される。中司照世は群内の詳細な分布調査、関連遺物や椀貸山・神奈備山両古墳の調査の成果を報告したうえで各支群の形成、全体の群形成、各前方後円墳の階層性、越前の後期前方後円墳について考察した⁽¹⁵⁾。総数301基のうち南部を坪江支群、中央部を瓜生支群、北部を中川支群とする。坪江支群では後期前方後円墳の坪江1・2・4号墳が混在するものの群形成の端緒をなす方形台状墓か方墳とみられる同16～21・24・25号墳などの方形墳丘の一群があり、中川支群では中心的な造営時期が後期に属し、瓜生支群では坪江・中川両支群の形成期の中間の様相がうかがえるとし、基本的には坪江支群→瓜生支群→中川支群という順次を推定している。つまり、本古墳群の変遷に関する見解は斎藤説に近い。

具体的に述べると、瓜生4号墳は最も古式で前期的な様相、中川支群に近接する瓜生18号墳は前方部がより発達し後出的な様相、中川支群東端の城ヶ岳古墳(中川70号墳)は前方部がさらに発達し一層後出的な様相が顕著として主稜線上の前方後円墳を瓜生4号墳→瓜生5号墳→瓜生18号墳→中川70号墳の築造順と推定し、瓜生支群から中川支群への推移を考えた。次に坪江支群は後期首長墳を除いた主稜線上の首長墳はいずれも帆立貝形前方後円墳で、一般的に5世紀代とみなされるが、越前内外の近隣他地域の首長墳の変遷の検討のみでも、最も先行するごく初期に属す例も必ずしも少なくない事実、坪江支群内の方形墳丘の集中的な分布を考慮し、最も先行する歴代首長墳で坪江58号墳→坪江59号墳→坪江61号墳→坪江62号墳と南部より北部へと順次築造、その多くは瓜生4号墳以前に属する可能性を示した。

中川支群については標高の高い痩せ尾根上で2、3の古墳で孤立的に分布する中川64～66(あるいは67～69も)号墳の一群、中川70・71号墳の一群という計2小群と、緩やかな丘陵上の密集状態で分布する中川1～14号墳の一群、中川15～63号墳の一群という計2群に分かれ、墳形では方形墳丘が中川41・42・62・64(あるいは69も)号墳のみで、他の古墳は円墳や前方後円墳・双円墳などとしている。中川7・10・12・18・20・51・61・64・65号墳は出土品から築造時期を限定し、石室から須恵器が多数出土したという中川1号墳(萩陵古墳)、須恵器片(6世紀代か)が採集された同2号墳、群集墳と呼ぶにふさわしい密集形態をとる同15～63号墳を踏まえると中川10号墳を除けば6世紀の築造で、数が少ない方墳は64号墳が同65号墳の陪塚や孤立的な存在から支群の大部分が後期に属するという。

また古川登・御嶽貞義は大賀克彦の古墳編年⁽¹⁶⁾にもとづき、越前の首長墓古墳について再

検討した⁽¹⁷⁾。金津地域の主要古墳については横山古墳群の坪江支群と中川支群が中心で、椀貸山古墳（前方後円墳45m・後Ⅱ期）と神奈備山古墳（前方後円墳59.8m・後Ⅱ期）の2基を越前の地方首長墓とし、これ以前の地域首長墓は張出付円墳の坪江58・59・61・62号墳、前方後円墳の瓜生4・5号墳を候補とし、神奈備以後は切石積横穴式石室を内蔵する円墳・方墳と考えている。そして中川支群が越前で最も後期前方後円墳が集中地と述べ、瓜生18号墳（前方後円墳31.2m・中Ⅲ期？）→城ヶ岳古墳（前方後円墳45.4m・中Ⅳ期？）→中川10号墳（前方後円墳44m？・後Ⅰ期）→中川65号墳（前方後円墳47m・後Ⅱ期？）→中川61号墳（前方後円墳41.3m・後Ⅱ期）→中川7号墳（前方後円墳49.4m・後Ⅱ期）→柵古墳（円21m？・後Ⅲ期）の系列を考えた。

中川65号墳については「埴輪と段築を有するが葺石を欠くことは確実」で、「同じく後Ⅱ期に位置付けられる椀貸山古墳・神奈備山古墳より下位にあった人物の埋葬」とし、「椀貸山古墳・神奈備山古墳が周辺に近親者を埋葬したとも考えられる小型古墳を随伴するのみであるのに対し、中川65号墳は群集墳に隣接しており、集団墓地の中に営まれた姿に越前地方首長を埋葬した奥津城の姿は見えてこない」と述べ、越前地方の首長墓から除外して考えている。

(4) 問題点の所在と方法論

横山古墳群の発見史および研究史を時系列で整理したが、群内における有力墓系列と越前の最有力墓系列に絞ると以下の2点に集約される。

第1に、群内の有力墓系列については、瓜生支群から中川支群を経て中川・坪江両支群への展開を考えた斎藤優の説、それを継承して坪江58号墳から神奈備山古墳までを一系列でとらえた中司照世の説、瓜生18号墳から柵古墳までを一系列でとらえた古川登・御嶽貞義の説、4群のうち3群を並列的に位置づけたうえで椀貸山・神奈備山までつながる系列のA群と、5世紀後半から新たな系列のD群と並列的に考えた青木豊昭の説がある。注目されるのは斎藤と中司、古川・御嶽らが一系列を想定し、青木だけがA・D群およびD群内を並列的にとらえた点にある。一系列か並列かは大きな問題で、かりに前者の視点に立てば統一的な印象になるが、後者の視点に立てば群内でのより重層的な政治体制が想定できる。これには古墳の築造時期を厳密に考え、限定的に比定することが重要となる。

第2に、越前の最有力墓については群内の椀貸山1号墳と神奈備山古墳の2基とするのが通説的理解であるが、中川65号墳を含めるかについては意見が分かれる。越前全体における最有力墓系列に関しては4～6世紀を通じて終始一系列で推移したとみる中司照世の説⁽¹⁸⁾、4・5世紀には一系列、6世紀には金津地域（横山古墳群）と松岡地域（松岡古墳群）と中心とする二系列の大首長が並立したとみる青木豊昭の説⁽¹⁹⁾が知られていた。しかし、後者の二系列説に対しては、青木が後期古墳とした鳥越山古墳は中司による時期的な批判があり⁽²⁰⁾、のちの永平寺町教育委員会による発掘調査の成果から中期古墳に位置づけられている⁽²¹⁾。また、

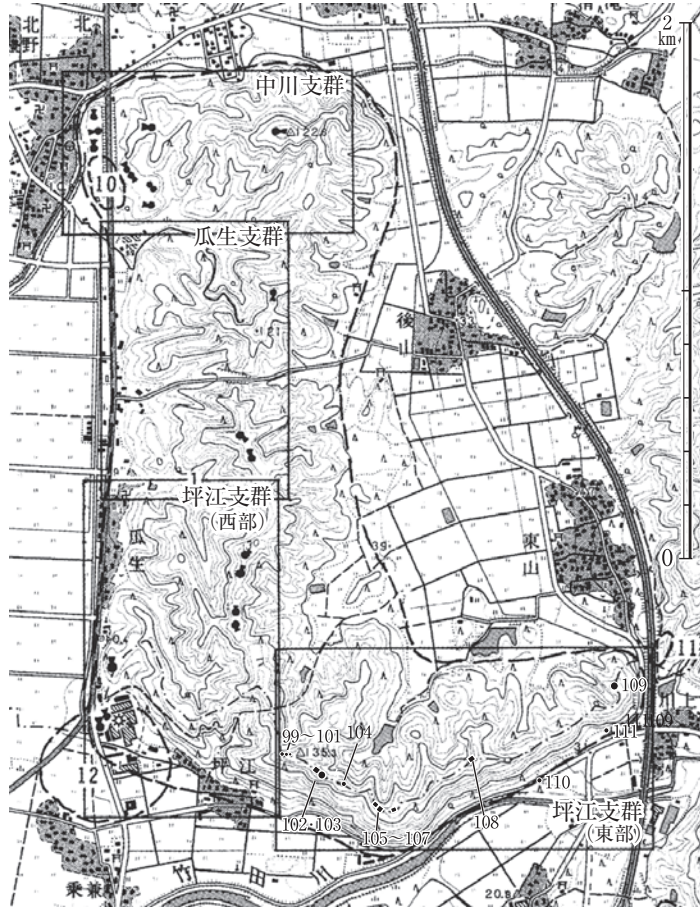
青木が二系列の根拠とする三峰山古墳は中世の山城跡と判明している⁽²²⁾。争点となる中川65号墳についても、中司は墳丘の観察結果の違いから実際よりも小規模で⁽²³⁾、古川登・御嶽貞義は葺石を施さず群集墳に隣接する点、同時期の椀貸山・神奈備山古墳との違いを指摘し⁽²⁴⁾、ともに越前地方首長墓（本稿の最有力墓）から除外している。現在は一列に考える向きが強いが、中川65号墳は二本松山古墳と椀貸山古墳の間に比定できる可能性を考えると、最有力墓系列を埋める古墳として再検討の余地がある。

加えて欠如している視点は陪塚に対する理解である。越前の最有力墓の場合、前方後円墳や造出付円墳を墳形として採用するが、主墳に隣接して小規模方墳が配される。従来、中川61号墳に対する62号墳、65号墳に対する64号墳など隣接する小規模方墳は陪塚として認識されているが、城ヶ岳古墳に隣接する中川71号墳、中川10号墳に隣接する9号墳などの小規模古墳も陪塚として理解できる。陪塚の有無は群内の有力墓系列を考えるうえで重要になるため、これらも併せて検討する必要がある。

以上をまとめると、横山古墳群内における有力墓系列については分布調査という性格から、築造時期が逆転して位置づけられる古墳などもあり、一列か並列的にとらえるかは見解の一致を見ていない。越前の最有力墓系系列については椀貸山古墳と神奈備山古墳の2基とし、椀貸山→神奈備山という築造順とするのが通説的な理解である。この前後の時期には他に有力墓とされる前方後円墳があり、最有力墓から除外されている前方後円墳にも陪塚を伴う事例がある。このような並列的なあり方は、重層的な政治体制もとらえられる。これらの問題点をもとに本稿で重視したいのは、現地踏査を踏まえ古墳の様相を詳細に把握することである。その判断の際には発掘調査がおこなわれた永平寺町の松岡古墳群における古墳の墳形と築造時期の比較、大規模古墳と隣接する小規模古墳との関係性、既存資料の見直しと新資料による補強という3つの視点をもとに検討する。これらを総合的に判断しながら有力墓系列について支群別に検討し、群内あるいは越前全体のなかで位置づけたうえで横山古墳群の歴史的意義について論じる。

2. 事例の検討

横山古墳群は北から南・南東にかけて中川支群、瓜生支群、坪江支群に分かれる。各支群における古墳の号数と分布状況および主要古墳の実測図については先学の成果を踏襲し、見解の異なる点、訂正箇所などについては適宜変更を加えている（第1図・第2図）。検討の対象としたのは従来時期について争点となっている古墳、各支群の前方後円墳や造出付円墳など墳長30m以上あるいはそれ以上の規模の古墳とした。坪江支群は西部と東部に分かれるが、東部の古墳は小規模で数も少なく詳細不明なため、有力墓系列の検討からは除外した。検討に際して重視したのは松岡古墳群との墳形の比較、陪塚との関係性、既存の採集資料と新資料による補

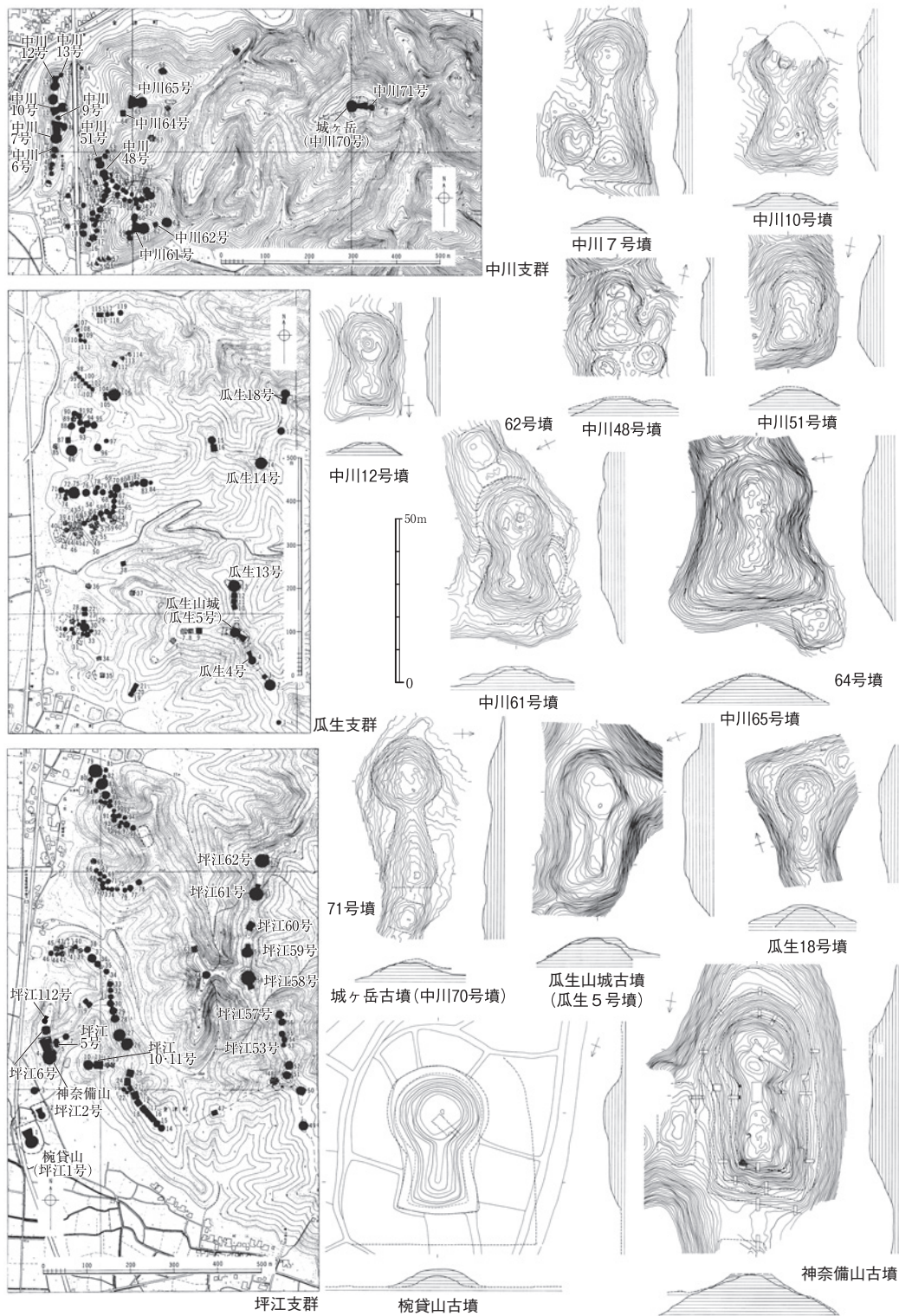


第1図 横山古墳群の全体図 [縮尺 1 : 30,000]

強という3つの視点である。本稿では、これらを総合的に判断しながら主要古墳の系列について支群別に再検討する。

(1) 中川支群

中川6号墳、中川7号墳 国道8号で東西に分断された西側の低丘陵上には前方後円墳3基がある。その南端にあたる中川7号墳は墳長49.4mの前方後円墳で、後円部径22mに対して前方部長28mと6mほど長く、城ヶ岳の前方部を拡張させた墳形である。段築・葺石・埴輪は確認できない。埋葬施設は中司照世により後円頂部付近で採集された緑色凝灰岩片と須恵器片から石室内蔵の可能性が指摘された⁽²⁵⁾。須恵器はTK10型式に比定できる。前方端部に東接する中川8号墳は陪塚的な感のある円墳で、中川7号墳→同8号墳の順が推定されたが⁽²⁶⁾、前方部の東側面を弧状に掘削して墳丘が喰い込む形で築造されるため陪塚とは考えにくい。7号墳に南接して中川6号墳が配される。現地踏査の結果から一辺10m四方の方墳と考え陪塚ととら



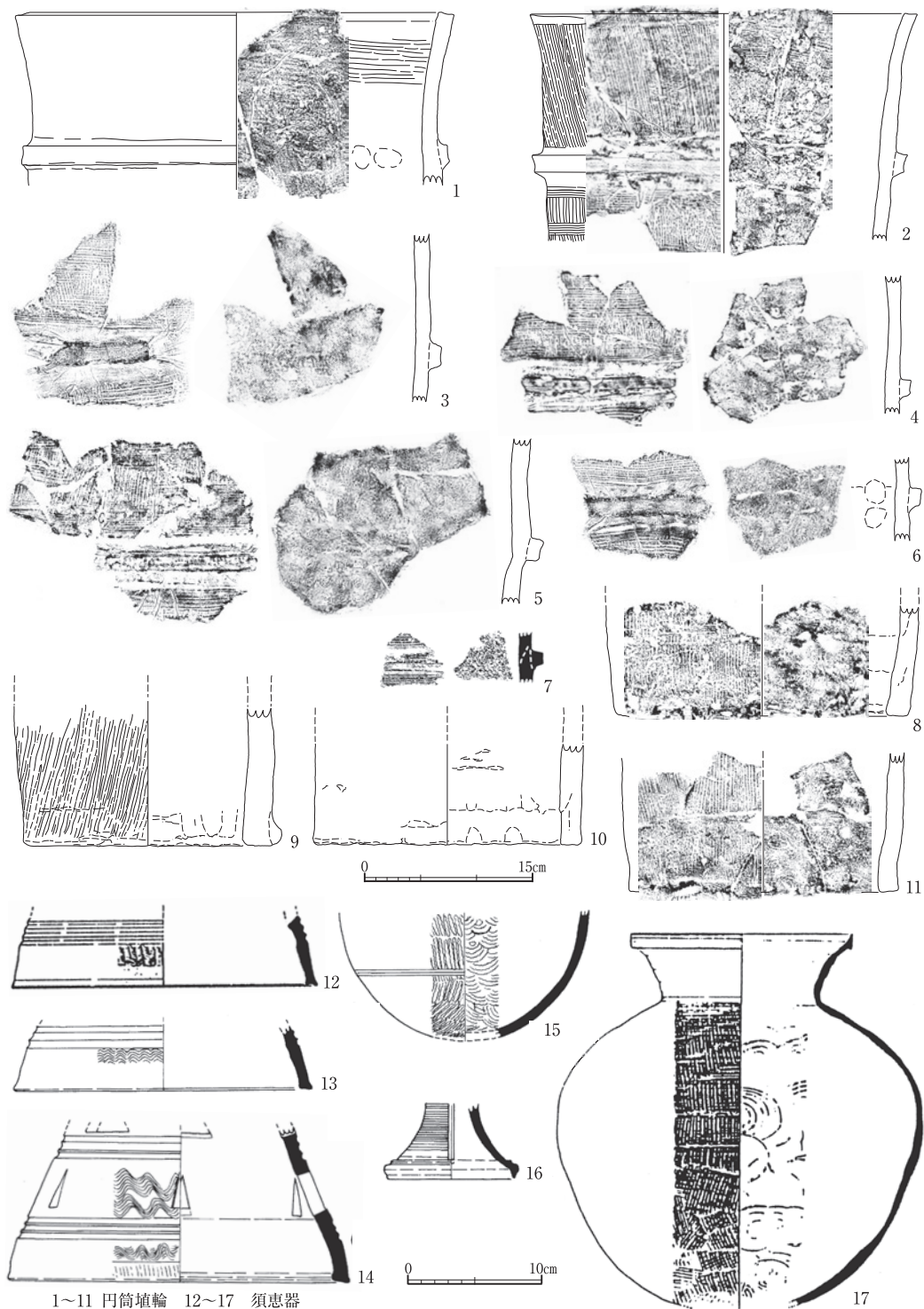
第2図 横山古墳群各支群の古墳分布と古墳実測図 [地形図は縮尺1 : 15,000, 古墳は1 : 2,000]

える。築造時期は須恵器の年代から後Ⅱ期新に比定する。中川7号墳は中川70号墳からの系列で、石舟山古墳と二本松山古墳と同じような墳形を呈し、かつ陪塚も有することから松岡古墳群の最有力墓との強い関係性を有していた可能性が高い。

中川9号墳、中川10号墳 中川10号墳は7号墳の北方に位置し11号墳との中間に所在する。後円東端部は国道8号建設に伴う工事で欠損するが、複元した墳長は約44mの前方後円墳で、後円部径23.5m、前方部部長約20.5m、くびれ部13.2mをはかる。前・中期古墳に比べ、後円部径に対して前方部幅が約26mと大きいのが特徴である。葺石は未確認であるが、前方部南側の墳丘中程で埴輪が樹立していた状況から二段築成と考えられる⁽²⁷⁾。埋葬施設は石材の散乱から石室を内蔵し、群内最初に採用された可能性が高い。後円部あるいはその周辺において埴輪片が採集された。埴輪は1点のみの報告で、円筒埴輪の胴部片とみられる。小片のため時期は不明であるが、第2次調整B種ヨコハケを施すことから川西宏幸編年⁽²⁸⁾（以後、川西編年と略する。）のⅣ期とみられる（第3図7）。

ここでは新出資料として個人蔵の円筒埴輪を報告する（第3図1～11）。1～2は口縁部である。1は緩やかに外反する口縁部で口径39.0cm、口縁部長12.7cmをはかる。調整は外面が摩滅のため不明で、内面が横方向の荒いハケ調整を施す。2は直線気味に立ち上がり端部にかけて緩やかに外反する口縁部で口径34.6cm、口縁部長13.3cmをはかる。調整は外面が縦方向の荒いハケ調整、内面がナデ調整で端部近くに横ハケを施す。外面には赤彩を施す。3～6は胴部片である。調整は外面が縦ハケのあと第2次調整B種ヨコハケ、内面がナデ調整を施す。破片のため特定は難しいが、B c種とみられる。8～11は底部である。第1条突帯は確認できず底部高の分かるものはない。底径をみると8は26.0cm、9は23.0cm、10は24.0cm、11は22.8cmをはかる。調整は外面が縦方向のハケで内面がナデを施す。すべての埴輪は無黒斑で、川西編年のⅣ期である。色調は淡黄灰色を呈し、焼成はあまり良くない。

以上、中司資料と新出資料を含めると12点を数える。全体の形状が分かる資料はないが、現状から規格の平均値を割り出すと、口径36.8cm、口縁部長13cm、底径23.95cmをはかり、基本的に一規格と考えられる。古川登は10号墳の埴輪をⅡ期d型式（TK23型式期）と位置づけて、中川支群における埴輪の初現（プロト尾張形）とみているが⁽²⁹⁾、2次調整B c種の点、内面に横ハケ調整を施す点など製作技法や全体的な雰囲気石舟山古墳・二本松山古墳の円筒埴輪と似ている。実際に松岡古墳群のものと比較すると、中川10号墳の方は器壁が相当分厚く、より粗雑な印象を受けるので、松岡古墳群の埴輪工人集団の影響のもと製作された可能性が高い。中川10号墳のものが粗雑で規格が大きくなる点は、松岡古墳群の影響下での生産ということで理解できる。他に松岡古墳群のもの埴輪の時期を決める判断材料として過去に採集された須恵器がある（第3図12～17）。後円部付近での出土といい、6点を数える。器台3点・壺底部1点・高杯脚部1点・甕1点で、TK23型式を中心とした時期に比定できる。須恵器の年代も踏まえると、円筒埴輪は二本松山古墳と同じような時期で、Ⅳ期末ないしはⅤ期初頭に比定して



1~11 円筒埴輪 12~17 須恵器

第3図 中川10号墳の円筒埴輪と須恵器 [埴輪は縮尺1:6、須恵器は縮尺1:5]

おく⁽³⁰⁾。10号墳は石室を内蔵し埴輪を樹立する点で、群内の有力墓系列のなかで画期となる重要古墳といえる。築造時期は須恵器と円筒埴輪の年代から後I期古に比定できる。

10号墳の前方部南側には墳丘に接しない形で中川9号墳が配されている。中司照世は陪家的な感のある円墳1基が近接していると述べるが⁽³¹⁾、現地踏査の結果から9号墳は一辺10m四方の小規模方墳ととらえられる。葺石・埴輪は未確認であるが、主墳の10号墳に伴う陪塚である可能性が高い。築造時期は10号墳との位置関係、須恵器・埴輪の年代から後I期古と考える。

中川12号墳、中川13号墳 中川12号墳は低丘陵の北端にあたり11号墳の北方に位置する。墳長約28mの前方後円墳で、後円部径16m、前方部長は13mとわずかに短く、前方部幅は約17mと大きく広がる。段築・葺石・埴輪は確認できない。埋葬施設は前方・後円両頂部に乱掘の痕跡はあるが、様相は不明である。墳丘から採集された須恵器はTK43型式に比定できる。築造時期は須恵器の年代から後III期古に比定する。群内最終段階の前方後円墳と考えられる。12号墳前方部の左隅には中川13号墳が外接している。中司照世により陪塚的な円墳とされているが⁽³²⁾、現地踏査の結果から一辺約7mの小規模方墳と考える。本墳は陪塚を方墳とする松岡古墳群の発掘調査の成果から陪塚の可能性を考えておく。

中川48号墳、中川51号墳 両墳は小規模前方後円墳で後円部同士が向き合う形で位置し、61・65号墳の中間にあたる低丘陵上に立地する。48号墳は墳長約25mで、くびれ部幅が広く前方部端は大きく開く。葺石・段築・埴輪は確認できない。埋葬施設付近の乱掘墳にもかかわらず様相は不明である。近接する陪塚的な位置づけとして小規模円墳3基（中川46・49・50号墳）がある。切り合い関係から50号墳→48号墳の築造順となるが、現地踏査の結果から他の2基も陪塚とは認めがたい。48号墳は独立して築造された古墳である可能性が高い。築造時期は中川61号墳との関係から後II期古に位置づける。中川51号墳は墳長約26mで、くびれ部幅が広く前方部端は大きく開く。段築や葺石は確認できないが、埴輪を樹立していた。川西編年のV期のもと考えられる。現地踏査でも同じ時期の埴輪片を確認した。埋葬施設は乱掘墳にもかかわらず様相は不明である。中司照世により後円部の乱掘墳内で採集された緑色凝灰岩片と須恵器甕片から石室を内蔵していた可能性が指摘されている⁽³³⁾。前方部左隅に東接する小規模円墳が2基（52・53号墳）あるが、現地踏査の結果から陪塚と考えず51号墳も単独墳の可能性が高い。築造時期は埴輪の年代と中川65号墳との関係から後I期新に比定できる。

中川61号墳、中川62号墳 中川支群中央部の低丘陵上には前方後円墳が3基ある。南端にあたる中川61号墳は墳長41.3mの前方後円墳で、くびれ部幅は広く前方部幅が大きく発達し墳丘外周に溝を部分的に施す。葺石は確認できないが、埴輪を樹立していた。埴輪は墳丘中程での樹立が確認されたため、二段築成の可能性が指摘できる。埋葬施設は後円頂部の乱掘墳内に石材が認められるというが、現状では確認できない。古川登は墳丘から採集した埴輪を報告し、底部の淡輪形という属性に注目して技法および年代上で近い北伊勢・伊賀・遠江のいずれかの地域からの伝播と考え、総じて東海との密接な関係性を指摘した⁽³⁴⁾。鈴木敏則は淡輪系埴輪

の全国的な集成をおこない、中川61号墳と鎌谷窯跡を含めた北陸の3例を紹介し、美濃を經由した北陸への伝播、伊勢からの影響を考えた⁽³⁵⁾。埴輪は川西編年のV期で、須恵器の杯蓋などはMT15型式に比定できる。また62号墳の後円部に東接して中川61号墳がある。中司照世は前方部右隅に西接する小規模円墳2基(58・59号墳)と前方部左隅に北接する小規模円墳(60号墳)を陪塚的な感のある古墳と述べるが⁽³⁶⁾、現地踏査の結果、中川61号墳は長辺12m×短辺10mの小規模方墳で、62号墳のみを61号墳に伴う陪塚と考える。築造時期は主墳と同じような時期と考えて後Ⅱ期古に比定する。

中川64号墳、中川65号墳 北端にあたる中川65号墳は墳長約47mの前方後円墳で、くびれ部幅は広く前方端部が大きく開く。東西方向を主軸とした配置の点で61号墳と関係性が深い。二段築成で葺石は確認できないが、埴輪を樹立していた。埋葬施設は墳丘上に露呈した河原石から、くびれ部付近開口の横穴式石室を内蔵する可能性が高い。埴輪については川西宏幸が尾張を中心として分布するV期の埴輪に類似性を指摘し⁽³⁷⁾、古川登により再報告がなされた⁽³⁸⁾。一方、青木豊昭は大首長墳ととらえ、先の61号墳も含め剣菱形の前方部とみなしたが⁽³⁹⁾、中司照世は大首長墓から外し墳丘下の自然地形として剣菱形を認めていない⁽⁴⁰⁾。現地踏査の結果、中司の見解に妥当性を認め、65号墳に段築を有する点を重視すれば二本松山古墳に後続で、その被葬者との関係性が指摘できる。また65号墳前方部の右隅に西接する形で64号墳が配される。長辺12.5m×短辺11mの小規模方墳で、段築・葺石は確認できないが、埴輪を樹立していた。埴輪は円筒埴輪片で6点を数え、そのうち1点は朝顔形とみられる。川西編年のV期に比定できる。築造時期は埴輪の年代などからTK47～MT15型式に比定できる。主墳である65号墳との位置関係から陪塚と考えられている⁽⁴¹⁾。築造時期は65号墳と同時期とみれば後Ⅰ期新に比定できる。

城ヶ岳古墳(中川70号墳)、中川71号墳 城ヶ岳古墳は中川支群東端の主稜線上に立地し、支群中央から最も離れた最高所に位置する。墳長45.4mの前方後円墳で、後円部径23mに対して前方部23mと同じ長さとなる。段築・埴輪・葺石は確認できない。東西に延びる丘陵の稜線を南北方向に切断し、前方部前端の溝を挟んだ東側に71号墳が配される。中司照世は「あたかも陪家的な感のある小型円墳1基(中川71号墳)」と述べるが⁽⁴²⁾、現地踏査の結果、円墳というより一辺11m四方の小規模方墳と判断した。城ヶ岳古墳を主墳とみればその位置関係から陪塚ととらえられる。松岡古墳群の古墳群と比較すると、城ヶ岳と石舟山の墳形が類似する点で相似墳の関係にある。城ヶ岳の墳丘長は正確ではないが、石舟山の墳長81mに対して城ヶ岳の墳長45.4mとすれば56/100の割合で、約2分の1の相似関係ととらえられる⁽⁴³⁾。加えて石舟山古墳には前方部前端を挟んで一辺13×10mの小規模方墳が配され、陪塚とみられる。中川71号墳も城ヶ岳古墳に伴う陪塚とみれば同じ位置関係となり、両者の深い関係性が指摘できる。両墳の築造時期は石舟山古墳と同じような時期と考え、中Ⅳ期新に比定する。

その他 最後に中川支群の方墳について検討する。ここまで48・51号墳を除いた4基の前方

後円墳（7・10・11・61・65・70号墳）には隣接して陪塚（6・9・12・62・64・71号墳）が築造され、しかも従来円墳と考えられた古墳は方墳である可能性も指摘した。他に中司照世は41号墳を方墳とするが、2基の古墳の中間部の自然地形の削り残しの可能性を指摘した⁽⁴⁴⁾。つまり中川支群は後期古墳（70号墳のみ中期古墳）で前方後円墳と円墳で構成されるが、陪塚だけは越前の伝統（六呂瀬山・松岡古墳群の事例）から方墳の形態をとった可能性を考えておきたい。

まとめ 以上を踏まえると、中川支群の有力墓系列は城ヶ岳古墳（前方後円墳45.4・中Ⅳ期新、主墳）・中川71号墳（方墳11・中Ⅳ期新、陪塚）→中川10号墳[前方後円墳44・後Ⅰ期古、主墳]・中川9号墳（方墳10・後Ⅰ期古、陪塚）→中川65号墳（前方後円墳47・後Ⅰ期新、主墳）・中川64号墳（方墳12・後Ⅰ期新、陪塚）・中川51号墳（前方後円墳26・後Ⅰ期新）→中川61号墳（前方後円墳41.3・後Ⅱ期古、主墳）・中川62号墳（方墳12・後Ⅱ期古、陪塚）中川48号墳（前方後円墳25・後Ⅱ期古）→中川7号墳（前方後円墳49.4・後Ⅱ期新、主墳）・中川6号墳（方墳10・後Ⅱ期新、陪塚）→中川12号墳（前方後円墳28・後Ⅲ期古、主墳）・中川13号墳（方墳7・後Ⅲ期古、陪塚）と考える。

(2) 瓜生支群

瓜生支群には主稜線上に前方後円墳が3基ある。北端頂部に瓜生18号墳、少し離れた南側頂部に瓜生山城古墳（瓜生5号墳）と南東側に瓜生4号墳である。築造順を特定するのは困難であるが、青木豊昭は瓜生18号墳→瓜生山城古墳→瓜生4号墳で450年以前、中司照世は瓜生4号墳→瓜生山城古墳→18号墳で前期末～中期前半に比定している⁽⁴⁵⁾。

瓜生4号墳 瓜生4号墳は墳長約28mの前方後円墳で、後円部径約16mに対して前方部長は12mと少し短い。段築・葺石・埴輪は確認できない。築造時期は前方部長が短くなることを根拠に瓜生山城古墳や瓜生18号墳の後続と考え、便宜的に中Ⅰ期に比定しておく。

瓜生山城古墳（瓜生5号墳） 瓜生山城古墳は瓜生山城跡により墳丘の改変は激しい。前方部付近の郭内に墳丘がおさまることを考え、墳長約42mの前方後円墳で後円部径22mに対して前方部長が少し短い約20mに復元する。段築・葺石・埴輪は確認できない。推測の域は出ないが、築造時期は手繰ヶ城山古墳、柄鏡塚古墳などと墳形が似ている点を評価し、前Ⅵ期に比定する。瓜生支群南側の最高所に位置し支群最大の点を踏まえ、群内最初の前方後円墳に位置づける。

瓜生18号墳 瓜生18号墳は墳長約31.2mの前方後円墳で、後円部径17mに対して前方部長は14.2mと短い。段築・葺石・埴輪は確認できない。築造時期は瓜生山城古墳より小型化し前方部長が短くなることを根拠にその後続と考え、便宜的に前Ⅶ期に比定しておく。

その他 瓜生13号墳は直径約25mの円墳で、段築・葺石・埴輪は確認できない。現地踏査の結果から西側に張出が附属する可能性も考えられる。築造時期は免鳥5号墳に類似性を認めれ

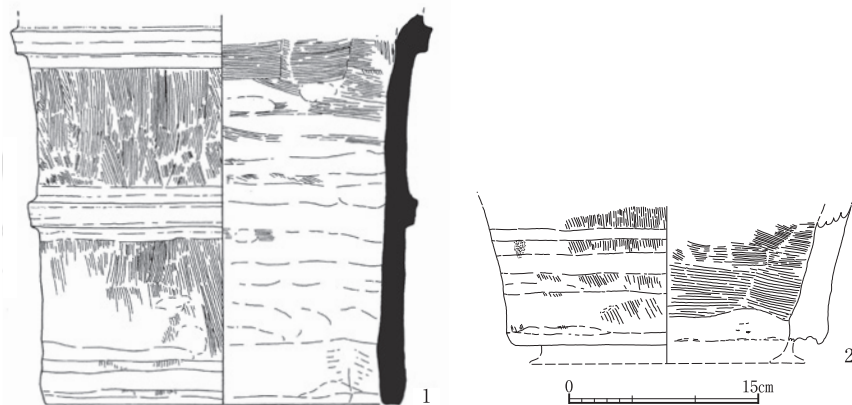
ば中Ⅱ期に比定できる。瓜生14号墳は直径約27mの円墳で、段築・葺石・埴輪は確認できない。中期前半の円墳化ととらえ、瓜生13号墳に後続する中Ⅲ期に比定しておく。

まとめ 過去の分布調査と現地踏査の成果にもとづき、前方部長が短くなる傾向と中期の円墳化、他の越前の古墳との墳形の類似性などを踏まえて築造時期を推定した。瓜生山城古墳は群内最初で墳長40m超の重要古墳と考え、手繰ヶ城山古墳（前Ⅵ期）と同じような築造契機を考える。次に瓜生18号墳（前Ⅶ期）、瓜生4号墳は瓜生山城古墳（中Ⅰ期）に比べて前方部が短くなる点を後続する系列の根拠とした。その後続としては中期前半の円墳化の傾向から円墳の瓜生13号墳（中Ⅱ期）と瓜生14号墳（中Ⅲ期）と便宜的に位置づけた。以上を踏まえると、瓜生支群の有力墓系列は瓜生山城古墳（前方後円墳42・前Ⅵ期）→瓜生18号墳（前方後円墳31.2・前Ⅶ期）→瓜生4号墳（前方後円墳28・中Ⅰ期）→瓜生13号墳（円墳25・中Ⅱ期）→瓜生14号墳（円墳27・中Ⅲ期）と考える。支群内の系列としては瓜生山城古墳から瓜生14号墳までを考えたが、瓜生13・14号墳は小規模の点から有力墓系列から除外する。

(3) 坪江支群

椀貸山古墳（坪江1号墳） 椀貸山古墳は坪江支群の南西端の山麓部平地に所在する。調査研究の蓄積があり、これまで青木豊昭、古川登、中司照世などにより二本松山古墳につぐ越前地方の大首長墓などと位置づけられてきた前方後円墳である⁽⁴⁶⁾。墳形・築造時期などを含めた様相は比較的明らかなため詳細は割愛し、基本情報だけ押さえておく。墳長45mの前方後円墳で、くびれ部11.9m、後円部径30m、前方部長15m、前方部幅25mをはかる。横穴式石室を内蔵し、奥壁には石屋形が付設される。盾形の周溝をそなえる。墳丘から採集された埴輪は8点で、土師質と須恵質が混在する。いずれも円筒埴輪で、川西編年のⅤ期に比定できる。底部外面にヘラケズリ調整を施した土師質のものは尾張系とみられる。石室開口時に内部から持ち出された須恵器は6点（壺2点、器台4点）で、MT15型式に比定できる。築造時期は須恵器の年代などから後Ⅱ期古に比定できる。

坪江2号墳（椀貸山2号墳） 坪江2号墳は墳形などの詳細は不明であるが、周溝を伴う墳長26mの前方後円墳に復元されている⁽⁴⁷⁾。埋葬施設は横穴式石室を内蔵し、副葬品として鉄刀1点・石突3点、土師器2点・須恵器16点、轡・鉄地金銅製鞍金具・同杏葉・木芯鉄板張輪鏝など馬具類8点が出土した。須恵器の壺・甕・器台などでMT15型式～TK10型式に比定できる。埴輪は円筒埴輪片で11点が採集された。川西編年のⅤ期に比定できる。注目されるのは尾張系とされる底部外面にヘラケズリ調整を施した埴輪で（第4図1）⁽⁴⁸⁾、他に新出資料として淡輪系の底部も認められる（第4図2）。淡輪系は本墳と中川61号墳のみで確認されている。築造時期は須恵器の年代などから後Ⅱ期古に比定する。隣接する椀貸山古墳と墳丘長軸の方向が一致する点を評価すれば、その関係性の強さが指摘できる。本墳は椀貸山を主墳とする陪塚と考える。



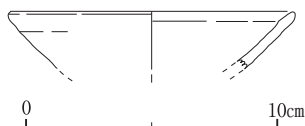
第4図 坪江2号墳の円筒埴輪 [縮尺1:6]

神奈備山古墳（坪江3号墳） 神奈備古墳は坪江3号墳の北方で、横山丘陵南西端の派生支脈端頂部に所在する。福井県教育委員会により発掘調査が実施されており詳細は比較的判明しているため詳細は割愛し基本情報のみにとどめる⁽⁴⁹⁾。墳丘は墳長59.8m、くびれ部26m、後円部径31.8m、前方部長28m、前方部幅25mをはかる。切石積の横穴式石室を内蔵し、石屋形が付設される。二段築成で、埴輪は確認できない。須恵器の壺・甕・器台などはTK10～43型式に比定できる。築造時期は須恵器の年代から後Ⅱ期に比定できる。

坪江5号墳、坪江6号墳 神奈備山古墳の陪塚については坪江5号墳、坪江6号墳の2基が候補となる。坪江6号墳は墳丘の大半が崩壊しているため様相は不明であるが、神奈備山古墳の前方部前面に位置する。墳形には2つの見解があり、梶幸夫は底辺長約14.0m×13.8m、墳丘高約1.3mの方墳で石室の可能性はなく、古川登により梶の採集埴輪（Ⅴ期）も報告される一方で⁽⁵⁰⁾、中司照世は復原径20m弱の円墳で石室材らしい石塊が若干存在し⁽⁵¹⁾、埴輪の帰属にも問題が残ると言う⁽⁵²⁾。神奈備山古墳の陪塚に位置づければ方墳の可能性を考える。ただし神奈備山古墳は埴輪を樹立しないので、埴輪は伴わないとも判断できる。仮に樹立したとしても単独古墳に伴う可能性が高い。むしろ神奈備山古墳の前方部東側に位置する坪江5号墳の方が陪塚的位置づけにふさわしく、半壊しているものの測量図から判断すると長辺25×短辺10mの小規模方墳ととらえられる。

坪江10号墳、坪江11号墳 坪江10号墳は直径約20mの小規模円墳で、坪江11号墳は一辺20m規模の小規模方墳である。ともに20m規模の墳長を有し隣接し、敦賀市の天筒山1号墳・2号墳が同じように円墳と方墳が隣接する状況と似ている⁽⁵³⁾。有力墓系列には含まれないが、10号墳の斜面では土師器高杯の口縁部片が採集されていて、古墳中期に比定できる（第5図）。築造時期は天筒山の両墳を中Ⅱ～Ⅲ期に位置づけたため、古墳中期中葉頃と考えておく。

坪江61号墳、坪江62号墳 坪江支群東部の主稜線上には主要古墳が4基あり、北から坪江62・61・59・58号墳である。坪江62号墳は墳長約28mの造出付円墳で、後円部径24mに対して



第5図 坪江10号墳付近の土師器高杯 [縮尺1:3]

前方部長4mの短い造出をそなえる。段築・葺石・埴輪は確認できない。坪江61号墳は墳長36mの造出付円墳で、後円部径30mに対して6m程度の短い造出をそなえる。段築・葺石・埴輪は確認できない。ともに測量図はないが、現地踏査の結果も踏まえて墳形・墳長などを判断した。築造時期は両墳ともに造出付円墳のため、免鳥5号墳・泰遠寺山古墳の影響を踏まえ⁽⁵⁴⁾、坪江62号墳は中Ⅱ期、坪江61号墳は中Ⅲ期に位置づける。

坪江58、坪江59号墳 坪江59号墳は墳長27mの帆立貝形古墳で、後円部径18mに対して9m程度の前方部が付く。段築・葺石・埴輪は確認できない。坪江58号墳は墳長34mの帆立貝形古墳で、後円部径25mに対して9m程度の前方部が付く。段築・葺石・埴輪は確認できない。両墳は情報が少なく、築造時期の特定は難しい。ともに測量図はないが、現地踏査の結果も踏まえて墳形・墳長などを判断した。築造時期は鳥越山古墳の影響も踏まえ、中Ⅳ期に位置づける⁽⁵⁵⁾。

坪江112号墳 坪江6号墳より北方に延びる丘陵の尾根上は、昭和40年代後半にブルドーザーによって削平され、かつては4基ばかりの円墳が分布していたことが知られているが⁽⁵⁶⁾、現地踏査の結果、円墳らしき墳丘が半裁された状況で確認でき、墳頂には石室らしき石組みの痕跡と付近で埴輪片を確認した。他に中司照世により坪江6号墳付近の埴輪として2点が報告されているが、これらと同じものと理解できる⁽⁵⁷⁾。埴輪は破片ではあるが、川西編年のⅤ期のものと考えられる。また付近では碧玉製管玉も採集されているという⁽⁵⁸⁾。円墳の北側には方墳があり、円墳に付属するように展開している。群内の古墳で埴輪を樹立するのは前方後円墳とそれに伴う陪塚のみである。南に隣接する神奈備山古墳と陪塚とした6号墳には埴輪を樹立しないことを考えると、円墳と方墳は同じ古墳となる可能性が高い。ここでは小規模前方後円墳と理解し、坪江112号墳とする。前方後円墳とすれば墳長21.3m、後円部径約13.3m、前方部長約8m、前方部幅約8mに復元できる。築造時期は埴輪の年代などから後Ⅰ期新に位置づけておく。

まとめ 坪江60号墳を介して北側の2基(62・61号墳)と南側の2基(59・58号墳)に分かれ、前者は張出ないしは造出ととらえて造出付円墳、後者は前者より張出が発達することから帆立貝形古墳ととらえる。発掘調査の事例を参考にすると、造出付円墳は免鳥5号墳(中Ⅱ期)・泰遠寺山古墳(中Ⅲ期)、帆立貝形古墳は鳥越山古墳(中Ⅳ期古)であるので、北から南への展開を想定し坪江62号墳(中Ⅱ期)→坪江61号墳(中Ⅲ期)→坪江59号墳(中Ⅳ期古)→坪江58号墳(中Ⅳ期新)の築造順と考える。なお青木豊昭は瓜生南5号墳(坪江56号墳)を墳長30mの前方後円墳としその陪塚採集の須恵器も紹介したが⁽⁵⁹⁾、中司照世は樹木の繁茂で視

界が不良で墳丘の流失・改変が激しいとして前方後円墳から除外した⁽⁶⁰⁾。現地踏査の結果、小規模円墳とみなす。須恵器はMT15～TK10型式に比定できるので、北から坪江62号墳から始まり58号墳以後の後期に坪江53～57号墳の一群が南に展開した可能性が高い。後続する有力墓系列は坪江111号墳（前方後円墳45・後Ⅰ期新）→椀貸山古墳（前方後円墳45・後Ⅱ期古、主墳）・坪江2号墳（前方後円墳26・後Ⅱ期古、陪塚）→神奈備山古墳（前方後円墳59.8・主墳、後Ⅱ期新）・坪江5号墳（方墳25・後Ⅱ期新、陪塚）と考える。

（4）群内における有力墓系列と最有力墓の選定

群内の有力墓系列は以下になる。瓜生山城古墳（前方後円墳42・前Ⅵ期）→瓜生18号墳（前方後円墳31.2・前Ⅶ期）→瓜生4号墳（前方後円墳28・中Ⅰ期）→坪江62号墳（造出付円墳28・中Ⅱ期）→坪江61号墳（造出付円墳36・中Ⅲ期）→坪江59号墳（帆立貝形古墳27・中Ⅳ期古）→坪江58号墳（帆立貝形古墳34・中Ⅳ期新）／城ヶ岳古墳（前方後円墳45.4・中Ⅳ期新、主墳）・中川71号墳（方墳11・中Ⅳ期新、陪塚）→中川10号墳（前方後円墳44・後Ⅰ期古・主墳）・中川9号墳（方墳10・後Ⅰ期古、陪塚）→中川65号墳（前方後円墳47・後Ⅰ期新、主墳）・中川64号墳（方墳12・後Ⅰ期新、陪塚）・中川51号墳（前方後円墳26・後Ⅰ期新）／坪江112号墳（前方後円墳21.3・後Ⅰ期新）→椀貸山古墳（前方後円墳45・後Ⅱ期古、主墳）・坪江2号墳（前方後円墳26・後Ⅱ期古、陪塚）／中川61号墳（前方後円墳41.3・後Ⅱ期古、主墳）・中川62号墳（方墳・後Ⅱ期古、陪塚）・中川48号墳（前方後円墳25・後Ⅱ期古）→神奈備山古墳（前方後円墳59.8・主墳、後Ⅱ期新）・坪江5号墳（方墳25・後Ⅱ期新、陪塚）、中川7号墳（前方後円墳49.4・後Ⅱ期新、主墳）・中川6号墳（方墳10・後Ⅱ期新、陪塚）→中川12号墳（前方後円墳28・後Ⅲ期古、主墳）・中川13号墳（方墳7・後Ⅲ期古、陪塚）の変遷を考える。

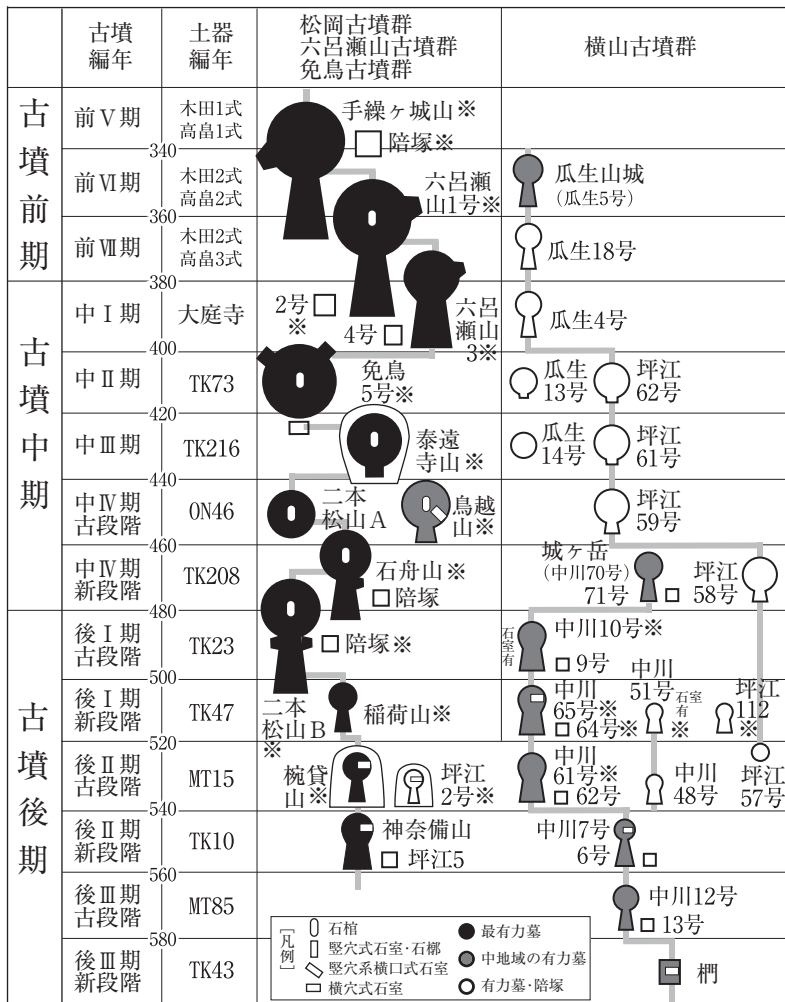
中地域における有力墓についてはすでに検討したので詳細は割愛するが⁽⁶¹⁾、墳丘規模などの点から瓜生山城古墳、城ヶ岳古墳、中川10号墳、中川65号墳、中川61号墳、中川7号墳、中川12号墳、柵古墳の8基を考えた。越前の最有力墓については墳丘規模が他より大規模で二段築成の点、葺石を有する点、埋葬施設が横穴式石室を内蔵する点などから椀貸山古墳と神奈備山古墳の2基のみと考えている。中川65号墳は二段築成で埴輪を樹立するが、葺石を施さない点で最有力墓からは除外し、中地域の有力墓と位置づけておく。

3. 若干の考察

事例検討を踏まえ、横山古墳群における有力墓および最有力墓の系列について時系列で整理しながら若干の考察を加える（第6図）。

最初的前方後円墳は瓜生山城古墳（瓜生5号墳）で横山丘陵中央の最高所への築造を考え、前期最大規模の点で手繰ヶ城山古墳の契機と関係させ、築造時期を前Ⅵ期に比定した。次は少

し小規模になるが、瓜生18号墳は前方部が短くなる点を重視して前Ⅶ期、さらに瓜生4号墳の築造順を考えて中Ⅰ期に比定した。前・中期最大の前方後円墳である瓜生山城を最初ととらえた点で、青木豊昭と中司照世の見解とは異なる。瓜生4号墳を最も新しく瓜生山城古墳→瓜生4号墳と位置づける点では青木の見解に近く、前期に遡らせて考える点では中司の見解に近いが、古墳前期後葉から中期初頭にかけての有力墓を一系列ととらえた点は従来の見解を踏襲している。その後続の有力墓系列の比定は難しい。坪江支群の北から南にかけて62・61・59・58号墳と4基の古墳が展開しているが、60号墳を介して62・61号墳と59・58号墳の2基単位での変遷も考えられる。しかし墳長に対する造出あるいは張出の長さは62号墳から61号墳、59・58号墳へと大きくなるため、他の越前の事例も踏まえ62・61号墳→59・58号墳の築造順を想定した。いずれも墳長30m前後の規模になるので、坪江62号墳（中Ⅱ期）→坪江61号墳（中Ⅲ期）



第6図 越前の最有力墓系列と横山古墳群の有力墓系列

→坪江59号墳（中Ⅳ期古）→坪江58号墳（中Ⅳ期新）の系列を考える。なお坪江58号墳の南に位置する57号墳付近では須恵器が採集されており、古墳後期に比定できる。したがって北から南へ向かって古墳が築造された可能性は高い。

次段階としては北部域の中川支群への前方後円墳の築造が始まる。なかでも東側丘陵の最高所に位置する城ヶ岳古墳（中川70号墳）は後円部高と前方部高がともに高くなる点で、中・後期的な前方後円墳の様相を呈している。中川支群最初の築造の点で重要古墳といえる。墳形は越前の最有力墓の石舟山古墳と酷似し、前方部前面に陪塚とみられる小規模方墳（中川71号墳）を配する点、高所に築造される点から築造時期は中Ⅳ期新に比定した。段築・葺石・埴輪は確認できないため、石舟山古墳の下位に位置づけられる。それから有力墓の築造は西側に展開する低丘陵に移動していく。なかでも中川10号墳は前方部幅が拡張した前方後円墳で、築造時期は円筒埴輪や須恵器（TK208～TK23型式）の年代から後Ⅰ期古に比定した。群内で初めて石室を内蔵する点、二段築成の点、陪塚とみられる小規模方墳（中川9号墳）が二本松山古墳と同じような場所に配される点、石舟山・二本松山古墳などの円筒埴輪と製作技法が似ている点から、松岡古墳群の影響のもと群内の有力墓としては画期となる重要古墳と考えた。その後続は中川61・65号墳で、ともに前方部幅が拡張し縦方向に扁平となる墳形の点、二段築成の点、円筒埴輪を樹立する点、陪塚とみられる小規模方墳を伴う点で共通している。ただし墳丘規模は65号墳が墳長47mで61号墳に比べて6mほど大きい。61号墳の須恵器杯蓋はMT15型式、64号・65号墳の円筒埴輪をTK47～MT15型式の併行期とみれば65号墳→61号墳の築造順となる。中川65号墳が築造される時期は二本松山古墳（後Ⅰ期古）の後続期にあたり、最有力墓の存在は不明である。以後に最有力墓が横山古墳群（椀貸山古墳→神奈備山古墳）へ移動することを考えると、その間に位置づけた中川65号墳は後Ⅰ期新段階の最有力墓の候補となる。しかし先にも述べた通り様々な条件から65号墳を最有力墓と考えることは難しい。65号墳には在地系ではなく尾張系の埴輪を採用している点で、その被葬者は東海地域と政治的な関係性を有していた可能性が高い。

中川65号墳を除外すると、最有力墓の系列に空白期間が生じる。そこで注目されるのは永平寺町の稲荷山古墳である。国道416号線建設時の消滅古墳のため扱いは難しいが、墳長約50m余りの前方後円墳で葺石・埴輪をそなえ築造時期は5世紀後半だという⁽⁶²⁾。近くの低地に築造された泰遠寺山古墳は中Ⅲ期に比定できるが、以後の松岡古墳群の大規模古墳の築造場所はかなりの高所に移動していく。一方で椀貸山古墳は墳長45mの前方後円墳で稲荷山古墳と同じ規模で低地に築造された点で共通する。しかも重視したいのは古墳の方向である。椀貸山古墳とその陪塚と考える坪江2号墳と神奈備山古墳は、いずれも同じ主軸方向をとる。稲荷山古墳も九頭竜川を挟むにもかかわらず同じような方向をとる。偶然の一致とは考えにくく、その関係性が指摘できる。推測の域は出ないが、二本松山古墳の後続として稲荷山古墳を位置づけ、同じ時期に中川65号墳が併存した可能性を考えておく。稲荷山古墳は松岡古墳群からの系列の

流れを汲むもので、中川65号墳は前方部が発達する特殊な墳形（愛知県断夫山古墳などの影響か）と埴輪の技術的系譜の一致などから東海との政治的関係にもとづいた技術交流が指摘できる。しかも中川10・51・65・61号墳など前方部が拡張する前方後円墳は埴輪を樹立し（48号墳については未確認）、しかも陪塚を除いた中川10・65・61号墳はいずれも二段築成となる。それ以外の松岡古墳群からの流れを汲む墳形とみる中川7・12・70号墳には段築はなく埴輪も確認できない。つまり墳形・段築と埴輪の有無には相関関係が認められる。先に述べたように前方部幅が発達する前方後円墳の点では共通しているが、埴輪に注目すると10号墳は在地系、65・61号墳は尾張系という違いがある。10号墳の被葬者は当初、松岡古墳群に代表される最有力墓の被葬者たちと関係性を有していたが、次段階になると東海との政治的なつながりを重視したことが読み取れる。

最後に坪江112号墳、中川48・51号墳という小規模前方後円墳に対する評価である。坪江112号墳は坪江支群に築造された前方後円墳で、後Ⅰ期新に比定した。従来前方後円墳と認識していなかった古墳で、陪塚をもたない単独墳と理解している。中川48・51号墳については中川支群に築造された前方後円墳で、後Ⅰ期新から後Ⅱ期古にかけての時期に比定した。後円部同士で向き合って配され、48号墳の南東に61号墳、51号墳の北東に65号墳が同じ距離にある。61号墳と65号墳の尾根は異なるが、同じ南北軸上に位置している。つまり61号墳に対する48号墳、65号墳に対する51号墳という陪塚以外の従属的なあり方が浮き彫りとなる。しかも坪江112号墳と中川48・51号墳の3基は陪塚をもたない。関連して注目されるのは後Ⅰ期新から後Ⅱ期古にかけて前方後円墳が集中する点である。後Ⅰ期新段階については中川65号墳（墳長47m）を主墳として中川51号墳（墳長26m）と同規模の坪江112号墳（墳長21.3m）の2基の前方後円墳、後Ⅰ期新段階については椀貸山古墳（墳長45m）を主墳として坪江2号墳（墳長26m）、中川61号墳（墳長41.3m）を主墳として中川48号墳（墳長25m）という前方後円墳が併存している。ただし椀貸山古墳と中川61号墳を比べると、最有力墓とされる椀貸山の方が優位性は高い。その点で中川61号墳は椀貸山古墳に対して下位に位置づけられる。つまり古墳後期前葉に一時的で限定的ではあるが、群内において重層的な政治体制を構築していた可能性が高い。

まとめると、後Ⅰ期新段階では主墳たる松岡古墳群の稲荷山古墳に対して中川65号墳と陪塚の64号墳、従属的位置づけの51号墳と坪江112号墳、後Ⅱ期古段階では主墳たる椀貸山古墳と陪塚的位置づけの坪江2号墳、従属的位置づけの主墳たる中川61号墳と陪塚の60号墳、従属的位置づけの48号墳という最も重層化された政治体制の構築が指摘できる。ちなみに横山古墳群の西方には2基の前方後円墳が知られる⁽⁶³⁾。タコ山古墳（墳長30m・前方後円墳）は高所築造が特徴的であり、八皇子山1号墳（墳長26m・前方後円墳）は中川7号墳と墳丘長軸方向が同じで低丘陵上に立地する。築造時期は不明であるが、高所築造の点で二本松山古墳の時期（後Ⅰ期古）、墳丘長軸が同じ方向をとる点で中川7号墳の時期（後Ⅱ期新）に比定しておく。群内での主要古墳が希薄な時期に位置づけるとすれば、中地域全体で重層的なあり方であった

可能性も考えられる。これについては今後の課題としておきたい。

おわりに

分布調査と一部の発掘調査の成果で有力墓系列について論じるのは難しいが、研究史を踏まえて現地踏査の結果および近年の発掘調査成果をもとに横山古墳群の再検討をおこなった。これまで並列説や一列説が提唱されていたが、坪江58号墳と城ヶ岳古墳を一部併存させて考えたものの、基本的には瓜生山城古墳（前Ⅵ期）から中川10号墳（後Ⅰ期古）までを一列説でとらえ直した。城ヶ岳古墳は中川支群最初の前方後円墳の高所築造とし、松岡古墳群の最有力墓との関係性から陪塚を伴う重要古墳といえる。陪塚の伝統はその後も継承されるため、横山古墳群の特徴と考えておく。一方、二本松山古墳以後の最有力墓系列については未詳であるが、古墳方向の共通性と低地に築造の点、葺石・埴輪をそなえる点から稲荷山古墳と考えて中川65号墳を下位に位置づけ、従属的な坪江112号墳と中川51号墳を擁する重層的な政治体制の構築を指摘した。次の段階には椀貸山古墳を主墳として小規模前方後円墳の坪江2号墳（椀貸山2号墳）を陪塚と考え、並存する中川61号墳を椀貸山の低位に位置づけ、さらに従属的な中川48号墳を擁する、より重層化した政治体制の構築を指摘した。しかし、この状況は一時的に過ぎず神奈備山古墳の段階で解消され、以後は円墳化が進む。

重要なのは埴輪を樹立する前方後円墳の墳形と埴輪の製作技法との関係性である。埴輪は前方部幅が拡張し縦に扁平化した墳形に多く樹立し、製作技法から東海との関係性が指摘できる。その関連でいえば横山古墳群付近に鎌谷窯がMT15型式期（後Ⅱ期古）に操業する⁽⁶⁴⁾。その操業時期は副葬品や消費地の事例を踏まえればTK47型式期に遡る可能性が高い。その点では後Ⅱ期新段階とした中川65号墳の築造時期とも照応する。中川10号墳の円筒埴輪は越前在地の伝統的な技術系譜とみるが、時期が下ると中川65・64号墳と鎌谷窯では尾張系、中川61号墳・坪江2号墳と鎌谷窯では淡輪系が生産されるため、須恵器生産を含めた東海との政治的な関係にもとづいた技術交流のなかで理解できる。とすれば従来の墳形を維持する城ヶ岳古墳→中川7号墳、椀貸山古墳→神奈備山古墳の伝統的な系列と、特徴的な墳形を有し埴輪を樹立する中川65号墳→中川61号墳・坪江2号墳などの新興勢力の系列が併存した可能性が高い。その意味では従来の伝統的な埴輪を樹立し、前方部幅が発達した墳形を採用する中川10号墳は画期となる重要古墳といえる。これ以後、越前では政治的な再編成が進み一時的ではあるが、従来の最有力墓の系列でとらえられる椀貸山古墳の被葬者を中心とし、東海との関係性をもつ有力墓の被葬者が参画するという最も重層化された政治体制を構築した可能性が高い。こうした状況は東海の勢力を含めた継体朝の政治・社会的変革のなかで理解できるが、これについては今後の課題としておきたい。

〔注〕

- (1) 中司照世2001「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』第8号、福井県立博物館。
- (2) 現地踏査は2021年12月3日・10日、2022年4月15日の3日間をかけて実施した。現地踏査に際しては、あわら市教育委員会の橋本幸久氏と九千坊英之氏にお世話になり、多くのご教示をいただいた。なお古墳の号数・呼称については混乱を避けるため基本的には中司照世の番号(中司前掲(1)文献)にしたがい、過去の号数との対応関係については適宜を示す。
- (3) 従来の研究史を踏まえて論述する場合は大首長・大首長墓などを便宜的に用いるが、従来の大首長墓と称される古墳に対しては下垣仁志の中立的な用語を選択すべきとの指摘を重視し(下垣2017)「最有力墓」、それ以外は「有力墓」の用語を使う(堀2022)。首長の継承的な権利・権力を思わせる「首長権」に対しても物質資料にあらわれにくい概念であるので基本的に使用しない。「系列」の用語についても血縁関係が含意される系譜という用語は使用せず、各地域内での時間軸を意識した古墳の縦のつながりに対しては「系列」を用いる。
下垣仁志2017「第二部 論考篇 第七章 首長墓系譜論の展開」『畿内の首長墳 平成25～28年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』立命館大学文学部。
堀大介2022「番城谷山5号墳の被葬者像(下)」『越前町織田文化歴史館研究紀要』第7集、越前町教育委員会。
- (4) 福井県坂井郡教育会1912「墳墓」『福井県坂井郡誌』名著出版。
- (5) 県忍1920「上古時代」『福井県誌 第1冊第1編 藩政時代以前』福井県。
- (6) 上田三平1920「第五章 ワンカシ山及附近の古墳」『福井県史蹟勝地調査報告第1冊 若狭及び越前に於ける古代遺跡』福井県内務部。
- (7) 波佐谷順成1957『金津町中川地区の古墳群』。
- (8) 高堀勝喜・吉岡康暢1966「六北陸」『日本の考古学Ⅳ 古墳時代(上)』河出書房新社。
- (9) 斎藤優1956「横山古墳群について」『若越郷土研究』1の1、福井県郷土誌懇談会。斎藤優1971「横山古墳群」『文化財調査報告』第21集、福井県教育委員会。
- (10) 中司照世ほか1978「Ⅲ 古墳の調査 3 神奈備山古墳」『重要遺跡緊急調査報告(I)』福井県教育委員会。
- (11) 古川登1983「坂井郡金津町・中川64号墳について」『福井考古学会々誌』創刊号、福井考古学会。
- (12) 古川登1983「越前及び加賀における6世紀代の埴輪について」『北陸の考古学 石川考古学研究会々誌第26号』石川考古学研究会。
- (13) 青木豊昭1985「越前における大首長墓について」『福井県立博物館紀要』第1号、福井県立博物館。
- (14) 青木豊昭1988「第3章 考察 第1節 六呂瀬山古墳群の位置づけ—越前における大首長墓について—」『付編 第2章 横山古墳群について—後期前方後円墳を中心として—』『六呂瀬山古墳群 国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会。
- (15) 中司前掲(1)文献。
- (16) 大賀克彦2002「凡例 古墳時代の時代区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
- (17) 古川登・御嶽貞義2002「越前地方における古墳時代—首長墓古墳の動向を中心に—」『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
- (18) 中司照世1984「第六章 考察」『泰遠寺山古墳』松岡町教育委員会。
- (19) 青木前掲(14)文献。
- (20) 中司前掲(1)文献。
- (21) 松井政信・浅野良治ほか2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書』松岡町・永平寺町教育委員会。
- (22) 松井政信1998「三峰山城跡」『第13回発掘調査報告会資料—平成9年度に福井県で発掘調査された遺跡の報告—』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター。
- (23) 中司前掲(1)文献。
- (24) 古川・御嶽前掲(17)文献。

- (25) 中司前掲（1）文献。
- (26) 中司前掲（1）文献。
- (27) 古川登氏にご教示いただいた。
- (28) 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会。
- (29) 古川前掲（12）文献。
- (30) 堀大介2019「二本松山古墳の築造に関する一考察—墳丘と埴形・出土遺物・石棺を中心に—」『学術財研究』第一集、『学術財研究』編集事務局。二本松山古墳の築造に関して埴丘と埴形・埴輪・石棺などの再検討をおこない、円墳（中Ⅳ期古）から前方後円墳（後Ⅰ期古）へ造り替えた可能性を考えた。
- (31) 中司前掲（1）文献。
- (32) 中司前掲（1）文献。
- (33) 中司前掲（1）文献。
- (34) 古川前掲（12）文献。
- (35) 鈴木敏則1994「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第2号、古代学協会。
- (36) 中司前掲（1）文献。
- (37) 川西前掲（28）文献。
- (38) 古川前掲（12）文献。
- (39) 青木前掲（14）文献。
- (40) 中司前掲（1）文献。
- (41) 古川前掲（11）文献。
- (42) 中司前掲（1）文献。
- (43) 松井・浅野ほか前掲（21）文献。
- (44) 中司前掲（1）文献。
- (45) 青木前掲（14）文献、中司前掲（1）文献。
- (46) 水野和雄1975「坪江ワンカシ山古墳の記録」『泡沫考古』第1号、越前文化財研究会、青木前掲（14）文献、中司前掲（1）文献。
- (47) 青木前掲（14）文献、中司前掲（1）文献。
- (48) 仁科章・青木隆佳2007「第八章 坂井町の考古資料」『坂井町誌 通史編』坂井市。
- (49) 中司ほか前掲（10）文献。
- (50) 古川前掲（12）文献。
- (51) 中司前掲（10）文献。
- (52) 中司前掲（1）文献。
- (53) 中野拓郎・奥村香子2020『市内遺跡発掘調査報告—向山1号墳資料整理等—』敦賀市教育委員会。
- (54) 松井・浅野ほか前掲（21）文献。田邊朋宏2007『免鳥古墳群 範囲確認調査概要報告書』福井市文化財保護センター。
- (55) 松井・浅野ほか前掲（21）文献。
- (56) 高堀・吉岡前掲（8）文献。
- (57) 中司前掲（1）文献。
- (58) あわら市教育委員会の橋本幸久氏に御教示いただいた。
- (59) 青木前掲（14）文献。
- (60) 中司前掲（1）文献。
- (61) 堀前掲（3）文献。
- (62) 松井政信2005「第1章 遺跡の位置と環境 第2節 歴史的環境」『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書』松岡町・永平寺町教育委員会。
- (63) 中司前掲（1）文献。
- (64) 久保智康1991「越前・若狭における在地窯の出現—福井県坂井群金津町鎌谷跡出土資料の検討—」『北陸古代土器研究』創刊号、北陸古代土器研究会。

〔挿図出典〕

- 第1図 中司照世2001「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』第8号、福井県立博物館の図2をもとに作成した。
- 第2図 中司照世2001「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』第8号、福井県立博物館の図4、図8、図9、古川登・御嶽貞義2002「越前地方における古墳時代—首長墓古墳の動向を中心に—」『小羽山古墳群』清水町教育委員会の第87図136、第88図130、132、141、149、156、第89図147・148、151～153、155をもとに作成した。
- 第3図 1～11は筆者が実測・トレースして作成した。12・17は青木豊昭1988「第3章 考察 第1節 六呂瀬山古墳群の位置づけ—越前における大首長墓について—」「付編 第2章 横山古墳群について—後期前方後円墳を中心として—」『六呂瀬山古墳群 国道364号線建設に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会の第15図25・28、中司照世2001「椀貸山・神奈備山両古墳と横山古墳群」『福井県立博物館紀要』第8号、福井県立博物館の図6・8・10・11をもとに作成した。
- 第4図 仁科章・青木隆佳2007「第八章 坂井町の考古資料」『坂井町誌 通史編』坂井市の図32の6と、古川登による実測図を筆者がトレースして作成した。
- 第5図 本文の内容および堀大介2022「番城谷山5号墳の被葬者像（下）」『越前町織田文化歴史館研究紀要』第7集、越前町教育委員会の論文をもとに筆者が作成した。

〔付記〕

本研究は令和4年度 JSPS 科研費 課題番号 JP21K20056、研究課題「継体大王の歴史学的研究—新たな国家形成史論を視野に入れて—」の助成を受けたものです。

(ほり だいすけ 歴史文化学科)

2022年11月15日受理